



ピクタインダクン

(おきみがりにぼし)

第24号

発行日 2020年2月1日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

川

川がながれる

雲をのせてながれる

わたしたちは岸にすわって

ただ 川をみている

わたしたちは小舟になり

川といっしょにゆれている

水面には

岸辺がうつっている

鯉がはねる音がきこえる

小さな波紋がおこる

やがて静寂に――

いにしえから

川はながれてきた

わたしたちも 永遠に 旅して

ごま豆腐

明日はハレの日

鍋に水、砂糖、塩、くず粉を入れ

よく溶かす

弱火で

とろりとろり

くず粉が固まってきたら

火を止め

ごまペースト、酒を入れ

再び点火

(沸騰しないよう丹念にな、と亡き母)

全体を 底から 均一に

木ベラでかき混ぜる

どんどん粘りがでて

餅のようになつとり

引きあつて手が重くなる

ネルル ネリリ オロロ

鍋の中からもつちりした声

(ポタツと、落ちる硬さだよ)

神々は

混沌とした海に

あめのぬぼこ
天沼矛を突きさし

かき回して

あめつち
天地をつくる

意志が

新しく生まれ

艶をまとう

(そう、いい塩梅に練れだな)

令和はじめての正月

食卓にのぼる

母の ごま豆腐

(おれの味、えぐ覚おべだごと)



ピアノの海

それは渚によせる漣だった

白い一条の光が

指先から流れだす

早春

見えない世界の

光のプレリユード

それは華やぐ波の譜だった

白金色の波濤が

海のおもてで躍動する

初夏

奏でる記憶の

波のボレロ

彼は海のペダルを漕ぐ

饒舌な波が盛り上がり うねり めくれる

晩秋

瑠璃紺の波動が海の底まで伝わり

海の鼓動が高鳴る

音符が五線を越え

なだれ込む

彼の感情が

海に注がれる

厳冬

白波が

岩に碎け

際立つリストの花が咲き乱れる

* 「辻井伸行リストの超絶技巧練習曲」を聞いて

雨

天の水瓶がこわれて
どしゃぶり

買いもの帰りの駐車場
一台の車が水しぶきを上げる
強烈なパンチをあびたわたし
ズボンについた染みは
輪郭をひろげはじめ

染みはいびつな形となる

遠い心を

さびつかせていた水が
両の眼から
したたり 落ちてくる

やがて
雨があたり
パールグレーの雲の切れ間から
薄日が差しこむ
水たまりにも

遠い心にも……

涙

いま
しめった匂い？

こころのなかを
かなしみ色がながれている

夜

こころは頼りなく

ゆらゆらと

小舟のようにただよっている

音のない部屋には

うごかない

水の絵のような時間

もう

朝の匂い？

カーテンをあけると
いつもの

かざらない光が

わたしをつつんでくれた

さみしさの雫は

落葉のうえに

すいこまれていった

ほんのすこし

朝の

やわらかい土の音がきこえたよう

曇

薄墨色の

翼をひろげた空は

町全体を翳している

人のいない 道

鳥のいない 空

とぎれなく

声振りたてて

うなる風に

木々は悲鳴をあげている

にわか

墨汁の雲が

びっしりと空を覆い

怒ったように落ちてくる

曇まじりの雨

ひとつづ

ひとつづの音が

とがった飛礫のよう

やがて

町は

白と黒をわける斑紋の

やわらかな輪郭のなかに

ガラス越しに触れる

つめたい冬

兄の芍薬

生家の跡地

乾いた地がしずかに横たわっている

玄関の引き戸を開ける

なつかしい声が

障子の隙間からこぼれてくる

六十四年前

横座の父の胡坐のなかには

末娘のわたし

酒と刻み煙草の臭いにまみれながらも

安心と威厳がある

台所では 母の

ミズを叩く* 小気味いい音

縁側の向こうには

しゃがんで池の鯉をのぞく兄の姿

父亡きあと四十年

日々の重さは途方もなく

母の腰は硬く曲がっていった

そんな母も 俳句に

人生の機微を詠むようになった

へかたくなになりし齢やねじり花

四年前

母は九十六歳で逝き

その一年後

兄も……

後ろ手に戸を閉めると

屋敷の一角に 兄の芍薬 一株

地を引き継いだ

生家の面影を知るひとの

私たちへの慮りに

残された芍薬も

やわらいだ表情^{かお}をみせていた

帰る家はもうなくなっても

芍薬は いつでも

なごやかな家族の団圓を彷彿させる

芍薬は思い出の地でも

みずからいのちを咲かせている

*郷土料理

徒然のエチュード 21

①

【人間観察】

パツパツと話し、結論を急いで求める人

ながく話し、疲れさせる人

先回りして、みずから答えを出す人

あなたはどのタイプ？

②

むかし

子どもだった皆さま

どんな大人になりましたか？

理想の大人になりましたか？

それとも……

③

ひとりごとが多いわよ
矢代さん！

そんなことないよねえ
母さん

(遺影の母に向かって)

これって

独語？

④

牛は草を食べて

肉になる

わたしも言葉を食べて
肉になる

⑤

食いすぎて
飛べなくなったり
なんていう鳥
いるかな？

食べなくても
太っているのは

わたし

だから 飛べない！

⑥

夢中になると

暑さも気にならない

詩作は安上がり！

(家計は黒字？)

⑦

惜しい

もうちよつと

かなり八合

と言われたら

俄然やる気が起きる

オトナのわたしでも

もつと頑張ろうと思う

ましてや子どもなら

尚更!!

⑧

8月19日は

俳句の日

詩の日は

4月9日、8月9日

⑨

こんがらがった糸は

気長に 丁寧

ほどく

いつか

からまりあつた糸が

すつと ほどけて

一本の まっすぐな糸になる

⑩

いま台風は

父島

あしたは

母島

あさっては

乳島あたり?

【ご案内】

第七回 「ピッタの会」勉強会

講師に保坂英世氏をお迎えし、左記の通り勉強会を開催いたします。演題は、「私的詩への取り組み方」です。

質問コーナーを設ける予定です。ご参加をお待ちしております。

日時 四月十二日（日）

時間 午後一時～三時半 無料

場所 あきた文学資料館

申込 参加希望者は、四月四日（土）までに、

矢代レイにご連絡ください。

☎090・1935・1180

【あしがき】

年はじめは第24号。コツコツと号を積み上げていきたい。

本年もよろしく願いたします。

*

次姉から色紙に書かれた母の句があったと、一句教えてもらった。これまで掲載した分と合わせて、母の句は二六三句となった。

確か、久しぶりに同級生と再会したときに詠んだ句。おそらく八十代半ばの作句と思われる。

〈再会の握手は双手藤の花〉

*

暮れの三十日、たまたまテレビをつけたら俳人の夏井いつき氏が映し出されていた。苦難のなか、氏を支えてくれたのが俳句だったので、「俳句の種まき活動」と称して全国行脚をしているという。

当初、彼女の行動は快く思われなかった。しかし、今では俳句ブームの火付け役として精力的に活動している。

偶然の出会いに感謝である。

